

論 文

宝暦名女川本「六人僧」における小舞の問題

稲 田 秀 雄

はじめに

鷺伝右衛門派の江戸末期の狂言台本に常磐松文庫本(旧称野中本)がある。もとはその一部であった『小舞集』(法政大学能楽研究所蔵。以下、能研本とする)に「六人僧」という狂言小舞の詞章が記載されている。これは鷺伝右衛門派のみに存した小舞と考えられるが、その詞章は以下の通りである。

荒々面白の 地主立の詠やな 桜色成小袖召て 雪の降に夜あるきハ 思ふ殿と連て 行や心成らん さぞな何事も 花の都の七条ハ 道場の内ぞ豊なる 鐘かすかに聞へて 音羽念ぶつの 珠数のつづを 繰返しかえしても 面白や難有やな 地主道場を廻る内ぞゆたか成 只頼め南無阿弥陀仏の御誓願 我世の中を走り廻らておのつから 破れし物を 紙衣の 御法も薄き人々の 実もかれたる声なりと 勤めゆきよに逢もせで 酒吞事ハ有明の 奄も地主もゑいじや 堪かたの別寺や あらたへがたのべつ寺や

同様の小舞は、やはり鷺伝右衛門派の長府伝承の小舞本である浜田家旧蔵『逆髮 他』<sup>(3)</sup>(山口市歴史民俗資料館蔵)(以下、浜田本とする)にも、以下の通り記載されている(型付は省略)。

あらく面白の 地主達のあそひやな。桜いろなる小袖召て 雪のふるに夜あるきハ。さそふ友とつれて 行や心なるらん さそ何事も 花の都の七条 堂上の内そゆたかなる 鐘かすかなる 音ハねふつの 珠数つづをくり返しかへしても おもしろや有かたやな 地主堂上をめぐる事そ久しき して「た、たのめ南無阿弥陀仏の御誓願 我世中を走しまわらてをのつから やふれし物ハ紙絹の ミのりもうすき人々の けにもかれたるこへなりと 勤めをゆきよにあいもせて 酒のむ事も有なから 庵も地主も

ゑじしや あらたえがたのべつ事や あらたへがたのべつじや 傍線を施した部分には能研本『小舞集』との小異が見られるが、同じ小舞であることは疑いない。

これらの小舞は、「六人僧」という曲名からしても、狂言「六人僧」(和泉流現行曲。大藏流にはない)と関連するものらしい。小舞の曲名が狂言の曲名と一致している場合は、その狂言の中で謡われ舞われる部分を切り出して、独立した小舞とする場合が普通だからである。しかし、現行和泉流の「六人僧」には、このような小舞(謡)は本文に含まれておらず、そうした小舞が挿入されるべき場面も見当たらない。池田廣司氏『狂言歌謡研究集成』(風間書房、平4)第一篇第三章「六人僧」には、先の能研本(野中本とする)の詞章が紹介されている(ただし、注解は施されていない)が、「曲中のどのような場面で謡われるのかは不明」とある。

狂言「六人僧」の最古の台本は、群小流派の台本と目される元禄十三年刊の続狂言記である。そこでも劇中に小舞らしきものは一切見えない。それでは鶯流ではどうか。鶯流の「六人僧」の台本として今まで知られているのは、鶯仁右衛門系統の佐渡伝承本(安藤本)<sup>(4)</sup>であるが、そこにも右のような小舞(謡)は記されていない。一方、鷺伝右衛門派の「六人僧」は、笹野堅氏旧蔵の宝暦名女川本「遠雑類」に存したが、長らく所在不明となっていた。しかし、この「遠雑類」を含む宝暦名女川本の離れ七冊分がこのほど見出され、法政大学能楽研究所の所蔵となった<sup>(5)</sup>。あらたに出現した宝暦名女川本「六人僧」の末尾にはまさしく、先の小舞の詞章が記されていたのである。

本稿では、この宝暦名女川本「六人僧」の末尾に添加された小舞の内容を検討し、そうした他流台本に見られない「小舞(及びそれが舞われる場面)の添加」がもつ意味を、「六人僧」の構想と関連させて考察してみることにはしたい。

## 一、小舞の注解

宝暦名女川本「遠雑類」所収「六人僧」の本文は、続狂言記とほぼ同じである<sup>⑥</sup>。その粗筋を続狂言記によって記す。男甲(シテ)は、男乙・丙を誘って仏詣の旅に出るが、道中どのようなことがあっても腹を立てまいと提案し、互いに誓う。途中辻堂で一休みし、甲が寝入ったところ、乙・丙二人がいたずら(強戯)で甲の髪を剃り、坊主にしてしまう。目を覚ました甲は驚くが、誓言の手前怒ることができない。甲は仕返しをしようと、在所へ戻り、乙・丙の妻に對し、夫二人が途中の川で溺れて死んだと言ったまじし、後世を弔うことを勧め、妻たちの頭を剃る。さらに引き返し、乙・丙に追いついた甲は、乙・丙の妻が自分たちの夫が川で死んだという話を信じ、跡を追って自害したと言い、嘆く乙・丙の頭を剃る。甲・乙・丙が連れ立って在所へ帰ると、甲は尼になった乙・丙の妻を呼び出して対面させ、一連の行為が甲の仕返しであったことが明らかとなる。怒った乙・丙夫婦は甲の妻を呼び出して頭を剃り、結局男女三人が出家の姿になってしまう。一同、これを菩提の種として後生を願おうと、皆で念仏を唱えて終わる(現行和泉流は、男女別々に極樂往生を願おうと、名残りを惜しみ、謡留めにする)。

宝暦名女川本の末尾(結末)近くを次に引用する。

アト「いざ参らふ 去りながら先在所へもどつてからの事に致さふ 又アト  
「そふも仕らふ (ト云テ常ノ通道行云テ) シテ「参る程に是じや 誰々の  
女房おでやれ (二人女出ル) シテ「某を此様にしたがよいか (四人ながら腹ヲ立テ) アト「是はいかな事 何としてよからふぞ あの人の女房も  
呼出してすらふ シテ「夫ハゆるして呉ひ 皆々「なんのゆるせ (ト云ま、  
よひ出してすりてわたぼうしかふせ六人なからぶたいへ出テさかもり(シ)  
てシテ舞」

宝暦名女川本の詞章は、先述の通り続狂言記にほぼ一致するが、右の傍線部「さかもり(シ)てシテ舞」というくだりは、宝暦名女川本において独自に付加されたものである。そしてその次に、酒盛りの場面で舞われる謡の詞章が記される。この謡は右の注記にあるように、当初から舞われるものとして制作されたことは明らかなので、便宜的にこの段階から「小舞」と呼ぶことにする。

シテ「あら〜面白の地主達の遊やな 地桜色成小袖めして 雪のふるに夜あハ さそふ殿とつれて 行や心成覽 さそな何事も 花の都の七条道成の内ぞゆたか成 鐘かすかにて 音羽念仏の数珠つぶを くり返し〜ても 面白や有難やな 地主道成を廻ル事ぞ久敷き シテ「唯頼め 南無阿弥陀ぶの御誓願 我世の中ヲ走り廻らておのづから やぶれし物を紙絹を 御法もうすき人々を 実もかれたる声なりと 勤ゆぎよにあひもせで 酒吞事ハ有明の 庵も地主も多、りいや 妙がたのべつしや あらたへがたのべつしや  
さらに、続狂言記と同じ結末部分が小字で記載されている。

シテ「昔からもこわされハせぬ事じやと云か此事じや 去ながら 是ハたゞ事でハ有まい 後世を願へと有おつて有ふぞ アト「誠にみじかい命を  
持ていたづらにくらさう事でハなひ程に是をほだひのたねとして後せうを願わふ シテ「それならバ某をんどを取テ申さう なもふだ 三人「なもふだ 女「なもふだ 皆々「なもふた〜〜とつはいひやろひ

宝暦名女川本では、酒盛りの場で小舞が舞われた後に、こうした(続狂言記と同じ)留めにするということか。あるいは小字での記載は追記の意味で、あくまで先の小舞(謡)をもつて結末とするが、参考までに続狂言記の留めを記したのか、いずれとも考えられる。台本(演出)としては、やや未整理な状態といえよう。

この結末近くの酒盛りの場で舞われる小舞の詞章について検討してみたい。なお、これまでこの詞章に注解が施されたことはない。まず、この小舞は、能「田村」第4段「歌」(クセ)のもじりであることを指摘しておく。以下に、江戸初期の光悦本<sup>⑦</sup>によって、該当する「田村」の詞章を示す。

「歌」地「あらあら面白の 地主の花のけしきやな 桜の木の間に洩る月の 雪も降る夜嵐の 誘ふ花と連れて 散るや心なるらん  
「クセ」地「さそな名にし負ふ 花の都の春の空 げに時めける装ひ 青陽の影緑にて 風のどかなる おとはの滝の白糸の 繰り返し返しても 面白やありがたやな 地主権現の 花の色も殊なり シテ「ただ頼め 標茅が原のさしも草 地「われ世の中に あらん限りはのご誓願 濁らじものを清水の 緑もさすや青柳の げにも枯れたる木なりとも 花さくらぎの装ひ いづくの春もおし並めて のどけき影はありあけの 天も花に酔

へりや 面白の春べや あら面白の春べや

先の小舞の詞章が右の謡のもじりであることは一目瞭然であろう。こうした特定の謡をもじった小舞は、舞狂言「通円」(能「頼政」の詞章をもじる)の一部を用いるものを除くと、比較的少ない。鶯伝右衛門派の小舞としては、能「海人」の「玉の段」をもどく「酒の謡」(浜田本所収)があるくらいである。

さて、能研本や浜田本の詞章は当て字とおぼしいものも多く、意味がとり難い箇所もある。そこで、小舞としては最古の詞章を伝える宝曆名女川本を基にして、適宜漢字を当てるなどして表記に手を加え、一応の釈文と校異を次の通り作成してみた。

シテ「あらあら面白の尼衆たちの遊びやな 地桜色なる小袖召して 雪の降るに夜歩きは 誘ふ殿と連れて 行くや心なるらん さぞな何事も 花の都の七条 道場の内ぞ豊かなる 鐘かすかにて 音は念仏の数珠粒を 繰り返し返しても 面白や有り難やな 時衆道場を巡ることぞ久しき」  
 テ「唯頼め 南無阿弥陀仏の御誓願 (地)われ世の中を走り廻らでおのづから 破れしものを紙衣を 御法も薄き人々を げにも枯れたる声なりと 勤め遊行に会ひもせて 酒飲むことは有明の 庵も尼衆(時衆)も酔へり (い)や 堪へがたの別時や あら堪へがたの別時や

【校異】

- 1 「遊び」―能研本「詠」(「ながめ」と読むか)、浜田本「あそび」。
- 2 「誘ふ殿」―能研本「思ふ殿」、浜田本「さそふ友」。
- 3 「七条」―能研本「七条は」、浜田本「七条」。
- 4 「鐘かすかにて」―能研本「鐘かすかに聞へて」、浜田本「鐘かすかなる」。
- 5 「数珠粒を」―能研本「珠数のつぶを」、浜田本「珠数つぶを」。
- 6 「巡ることぞ久しき」 能研本「廻る内ぞゆたか成」、浜田本「めくる事ぞ久しき」。
- 7 「走り廻らで」―能研本「走り廻らて」、浜田本「走しまわらて」。
- 8 「破れしものを紙衣を」―能研本「破れし物を紙衣の」、浜田本「やふれし物ハ紙絹の」。
- 9 「人々を」―能研本「人々の」、浜田本「人々の」。
- 10 「勤め遊行に逢ひもせて」―能研本「勤めゆきよに逢もせて」、浜田本「勤めをゆきよにあいもせて」。

11 「酒飲むことは有明の」―能研本「酒呑事ハ有明の」、浜田本「酒のむ事も有なから」。

12 「庵も尼衆(寺衆)も酔へり(い)や」―能研本「庵も地主もぬいじや」、浜田本「庵も地主もぬじしや」。

能研本とのみ一致する7・8は小異といえる。宝曆名女川本の小舞はどちらかといえば浜田本と多く一致する(1, 3, 5, 6)。2も浜田本に近い。4も音数からすると浜田本に近い。11は本文が能研本、傍記が浜田本と一致する。8・9・12は傍記が能研本・浜田本ともに一致する。宝曆名女川本の小舞詞章は、長府伝承の浜田本のほうにより正確に伝えられているようである。このことは鶯流の地方伝播の具体的様相、ひいては長府鶯流の位置付けを考えるための一つの手がかりになろう。

以下、小舞の詞章について、ささやかな注解を試みる。小舞の冒頭、「あら面白の尼衆たちの遊びやな 地桜色なる小袖召して 雪の降るに夜歩きは 誘ふ殿と連れて 行くや心なるらん」とある。傍線部は諸本すべて「地主」と表記するが、これはもちろん「じめし」ではなく「じしゆ」と読むのであろう。それは、能「田村」の「地主(権現)」を踏まえることから明白である。しかし、小舞の詞章としては、ここは「地主」の意味ではあるまい。この場面では、剃髪した男(夫)と女(その妻たち)が三人ずついることを考えれば、「時衆」(時宗の僧侶)の他に、「時刻を定めて始終念仏を唱える僧侶」の意もある)、さらにいえば「尼衆」の意ではなからうか。

「若市」という狂言に、「尼衆」と解される言葉がある<sup>(8)</sup>。ある上人(宝曆名女川本は「四条道場」の上人とする。和泉流は「六条道場」、大蔵流は「四条あたり」の上人)にハラスメントを受けた若市という尼が、仲間の尼たちを引き連れ武装して上人の坊へ押し寄せ、ついには上人の帽子(頭巾)をかき落とし、喜び勇んで帰るところは次のようである。

のこりのちしうはよるこびて、じつくくとおどりつれて、く、わが領々にぞかへりける (虎明本)

池田廣司氏・北原保雄氏『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇』中(表現社、昭48)「若市」の頭注には、右の「ちしう」について、「尼衆」。尼たち。「ち」は尼の漢音。呉音は「に」とある。ちなみに、大蔵流の主要な諸本では、「残りの尼衆」(虎寛本)、「残りの寺衆」(伊藤源之丞本)、「残りのち衆」(虎光本)



などと表記される。和泉流では、最古の天理本(抜書)に、「このりの寺衆」とある他、「残りの寺衆」(和泉家古本抜書)、「残の寺衆」(雲形本別編とある。なお「若市」は鷺流にも江戸前期から存し、右の箇所は「残りの寺衆」(寛政有江本)、「残りのぢしゅう」(賢茂五番綴本)、「残りのぢ中」(宝暦名女川本)、「残りの地中」(常磐松文庫本)などと表記する。

小舞では、右に続けて「桜色なる小袖召して 雪の降るに夜歩きは 誘ふ殿と連れて 行くや心なるらん」とあるのを見れば、このくだりは剃髪(舞台では花帽子を着る)したものの、衣服は未だ常のままである妻たちの、ややちぐはぐな姿を表現しているのではないか。そうすると、先の虎明本の注にあるように、ここはやはり「尼衆」(尼たち)の意味と解したいところである。

この小舞には他にも「時衆道場を巡ることぞ久しき」、「庵も尼衆も酔へり(い)や」のように、「ぢしゅう」という言葉が頻出しており、それぞれ右のような字を当てた。後者は、「庵」を尼の意とすれば、それと併称される「ぢしゅう」を「時衆(あるいは寺衆か)」と解することもできよう。また、前者の「時衆道場」は、それに先立つ「花の都の七条道場の内ぞ豊かなる」という詞章と併せて考える必要がある。京都の時宗寺院は、「若市」の上人の住坊がそうであったように、おおむね「〇〇道場」という通称をもつ。右の「七条道場」も、かつて下京の七条東洞院にあった七条道場・金光寺のことであろう(近代に東山区の長楽寺に合併。下京区に現存する市屋道場・金光寺とは別の寺院)。そのように、「道場」を時宗寺院の意であるとみて、「時衆道場」と当てた。

以上のように、この小舞に見える「ぢしゅう」の語は多義的であり、それぞれの文脈において二重の意味をもつ掛詞となっている可能性も排除できない。従って、ここで当てた字はあくまで暫定的なものであることをおことわりしておく。

この他、「勤め遊行に会ひもせで」は、宝暦名女川本「ゆぎよ」を「遊行」と考えてみたが、いかがであろうか。先の「道場」の連想から、一遍に始まり時宗歴代宗主の呼称にも用いられる「遊行(上人)」を想定して当ててみた。

小舞の末尾「堪へがたの別時や あら堪へがたの別時や」であるが、宝暦名女川本「べつし」、能研本「別寺」、浜田本「べつ事」と表記は様々である。ここは「別時」と解してみた。別時とは、念仏行者が特別の時に念仏する「別時念仏」の謂いであるとともに、「別れる時」の意味もあり、その意味も含ませ

るのである。

総じてこの小舞は、にわか僧とにわか尼が酒盛りする場面で舞われることからしても、そこに描かれるのは、まず「尼衆・時衆たちの遊び」の光景なのである。それはまず「(あらあら)面白の」光景である。途中に「七条道場」が出て来て、そのような道場を巡る僧尼としての生活(修行)のさまが描かれたりするが、最後は「酒飲むこと」「庵も尼衆(寺衆)も酔へり(い)や」という酒盛りの「今」に戻って来るようである。そして締めくくりは「堪へがたの別事」となる。

この小舞の詞章は、狂言のそれまでの展開を必ずしも踏まえるのではなく、あくまで「にわか僧・尼のちぐはぐな姿での酒盛り」という当該場面の光景、そしてそれを「田村」の謡のもじりとして綴ることが主眼なのである。筆者はこの小舞の詞章に始めて接した時、遊興性と求道性が混在(面白や有り難やな)する表現に戸惑いつつ、狂言「六人僧」の内容とあまりそぐわない印象を受けた。そのため本当にこれが「六人僧」の中で舞われる(謡われる)ものかどうか半信半疑であったが、今や宝暦名女川本「六人僧」にこの小舞(謡)が記載されている事実は動かしようがない。次は「六人僧」という曲の構想をあらためて検討し、このような小舞を添加した意味を考えてみることにしよう。

## 二、「六人僧」の構想と近世的展開

狂言「六人僧」の先行研究としては、池田廣司氏「狂言と近世文芸―『六人僧』を中心として―」(川口久雄編『古典の変容と新生』明治書院、昭59所収)がある。この論考で、池田氏は、寛永十六年九月十三日に近衛信尋が南都でこの曲を見た記録(『南都道記』、『本源自性院記』所収)を紹介されているが、これは本曲の最古の上演記録である。また、池田氏は、この時に奈良の禰宜衆が上演していることから、「六人僧」は「南都禰宜衆を中心とする町衆」の狂言であったと推測されている。確かに、群小流派の台本と目される続狂言記が初出であり、和泉流でも江戸初期の古台本になく、江戸後期の明和中根本から見えることもそれを裏付けよう。なお近年、この狂言を描いた古図(国文学研究資料館蔵『狂言絵』)が見出された。また「六人僧」は、落語「大山詣り」の原典とされ、落語研究においても言及されていることを言い添えておきたい。

まず本曲の筋立ては、先述の粗筋からもわかるように、狂言としてはかなり複雑であり、場面転換も多い。しかし、先に示した本曲の粗筋をさらに整理してみると、次のような構造が見出される。

- 1 強戯 男乙・丙は、寝ている男甲の頭を剃る。
- 2 強戯の仕返し① 男甲は、男乙・丙の妻をだまして頭を剃る。
- 3 強戯の仕返し② 男甲は、男乙・丙をだまして頭を剃る。
- 4 仕返し①・②の仕返し 男乙・丙は男甲の妻の頭を剃る(和泉流では、男甲の妻は自ら頭を剃って登場する)
- 5 結末 一同は思わざる剃髪を機縁として、後生を願うことにする。

つまり、一見複雑に見える本曲の筋も、「頭を剃る＝剃髪」という所作(演技)の繰り返し(反復)が基本であることがわかる。それは最初、たちの悪いいたずら(強戯)として行われ、以下はその仕返しとして、男乙・丙及びそれぞれの妻に対して繰り返し返され、さらにそのまた仕返しとして、男甲の妻の頭が剃られるまでに発展する。

繰り返される、この剃髪という行為が本曲の構想・構造上重要な要素(モチーフ)であることは明らかであろう。そうした行為は舞台においてどのように表現されるのか。宝暦名女川本では、1においては、まず寝ている甲の頭を剃る(剃髪)で剃る(其内二手合してすりにかゝる)。頭の片側を剃ったところで、耳へ水を入れ寝返りを打たせ、さらに剃り、肩衣を衣に取り替える(「：かみそりのゑにて耳へひとしづくおとすまねをする。そこでねかへる。又もんです。ずきんをかぶせかたきぬとり衣きせて」。また2では、妻二人の頭に剃刀を当て、綿帽子をかぶせる(二人して我先にそらす。すりてからわたはうしかぶせる)。3の乙・丙の剃髪は「二人ながらそりてづきんかぶせかたきぬ取ころもきてもよし」とあり、やはり頭巾をかぶせ(衣を着せる)ことで、出家の姿になったことを見せる。なお、以上の所作に関する注記は、いずれも続狂言記と同じものである。

この一連の所作(演技)のうち、特に2・3・4の剃髪は、男や女の出家を扱った「呂蓮」「拄杖」「昆布布施」などの曲にも見出される。いずれも剃刀を用いた剃髪は所作が認められ、ここはそうした演出の応用と考えられる。

○シテふところより紙につ、みたるかみそりを取り出し、手合などして、そるていをしてづきんをきする、かたきぬとつて、衣きせて、(下略)

○ろれんのことくかみをそり、衣をきせず、名をつけぬ斗也、づきんきする  
と、其ま、女いづる、又衣をきする事も有 (虎明本「拄杖」)

○いづれもしゆじやうの心也、衣もきせて十念をさづくる也(天理本「呂蓮」)

○ところより、かみそりを取りだし、手合して、かしろの上にておがみ(中略)かみを三度そる時に、なむきゑぶつ、くともいふ、ざんぎ五かいをさづけけり(中略)づきんをとり出しきせて「衣をきする時、ころもをいた、く (虎明本「呂蓮」)

○かみそり取出し、剃るまねして、頭巾着せて、肩衣とらせ、衣をも、小僧と言ふて、褌綴着せて「美男ながら剃るまねし、綿帽子がつくる内に (続狂言記「昆布布施」)

まず剃刀で剃る真似をし、頭巾を着せることで剃髪されたことを表し、さらに衣を着せて完全に法体になったことを表現する。なお「昆布布施」の場合は、夫だけでなくその妻も望んでにわか出家となる。ビナン帽子の上から綿帽子をかぶせるのも「六人僧」の2の場面(二人の妻の剃髪)と同じ演出である。

しかし、右に掲げた「呂蓮」「拄杖」「昆布布施」における剃髪は、いずれも発心・出家を前提として、剃られる者が自ら望んだことであった。それに対して、本曲は、強戯としての望まざる剃髪(1)であり、その仕返しとしての剃髪(2・4)なのである。しかしながら、そのことを機縁として全員が仏道に入ることを決意する(5)。つまり、本曲では、不本意な剃髪であっても、それを機縁(菩提の種)として、頭を剃った(剃られた)全員が後生を願う(修行に出る)という結末になっているのである。

続狂言記(宝暦名女川本も同じ)の結末は、以下の通りである。

シテ「昔からも、こはざればせぬことじやと云が、此ことじや、去ながら、是はたゞことでは有まい、後世を願へと有お告で有ふぞ」アド「誠に短ひ

命を持て、徒に暮らさふことでない程に、是を菩提の種として、後生を願はふ、シ「夫ならば、某音頭を取て申さふ、なまふだ 三人「なまふだ 比

丘「なまふだ 昔々「なまふだくくく、とつばい、ひやろ、ひ

一方、和泉流諸本の結末は次のようである。まず和泉流「六人僧」の最古の詞章を伝える江戸後期の明和中根本を掲げる。

シ昔からこわされハせぬものしやと云にいわれぬ事を召した故此様に成た

所詮是をほだいの種として後世を願　アト云シカくいろく有つて　シ  
 三人ともに修行に出る程にそなた達ハ留主をおしやれ　暇乞アリテ　女三  
 人あら名残惜しや　坊主三人こなたも名残惜しけれとあの日を御覧うせ　ト云  
 テ舟渡智ノ如ク三人相舞ニナル　留替ルコトナシ  
 三人の男たちは修行に出、三人の妻たちは留守をすゝとて、互いに別れること  
 になる。「舟渡智ノ如ク」とあるが、「あら名残惜しや」以下の語は「伊文字」  
 に同じ。そもそも和泉流「舟渡智」の語は「伊文字」からの取り込みであろう。  
 以下、和泉流秘書・雲形本(大本)も同様の結末であるが、和泉流秘書により、  
 留の語の全文を掲げて置く。

女三人「あら名残りおシヤ　男三人「此方も名残りおしけれとあの日を御ろ  
 うせ　女三人「山の端に懸た　男三人「めい／＼さりと梅ハほろりと落る  
 とんもまりハ枝二とまつた／＼とまり／＼とまつた　ト、イヤア  
 なお、三宅派の狂言集成本はやや異なり、男(僧)三人と女(尼)三人は別々に修  
 行に出ることになり、別離する。語は「伊文字」のそれに基づきつつ、後半を  
 変える(傍線部)。

シテ「・・・是はひとへに仏の御方便ぢや。此上は三人の尼は勝手に修行  
 召され。こち衆三人はいよく同行になつて。是より直ちに西国四国坂東  
 八ヶ国を巡つて。霊場を拜まうと思ふが何とあらう。アド二人「これは一段  
 とよからう。シテ「はやこれ迄ぞ。お暇申す。女三人「あら名残多しや。シテ「こ  
 なたも名残惜しけれど。あの日を御覧せ。五人「山の端にかゝつた。シテ  
 「西方に落日くれなる。六人「我等を助けたび給へど。唯一念に南無阿弥陀  
 仏。唯一念に南無阿弥陀仏。念仏申して別れけり。

なお鷲仁右衛門派の佐渡伝承本(安藤本)の結末は統狂言記にほぼ同じである  
 が、念仏のあと、男女ともに、高野山へ赴くことになる。

以上のように、「六人僧」の結末には、(謡の有無に関わらず)諸流台本を通  
 じて、強戯及びその仕返し(返報)としての剃髪を機縁として、後生を願う(仏  
 道修行に出る)という構想がはっきり認められるのである。

このような構想は、狂言においては、本曲と同じく、剃髪あるいは意図せざ  
 る出家の場面がある「悪坊」「悪太郎」と共通する。池田廣司氏は前掲論考で、  
 本曲が「腹立てず」の発想とともに、「悪太郎」の「俗人無理剃髪型説話」の  
 手法を突き交せて作られていることを指摘されているが、本稿では、特に「六

人僧」の結末部分に関わって、「悪坊」「悪太郎」との関連をさらに考えてみる  
 ことにしたい。

「悪坊」「悪太郎」では、はからずも僧の姿(剃髪等により)になった酔狂人の  
 男が、それをきつかけに、本当に遁世し、仏道修行に赴く姿が描かれる。とり  
 わけ「悪太郎」には、剃髪の所作がある。酔狂人の悪太郎が酔って寝ている間  
 に、伯父が彼の頭を剃ってしまうのである。ここは「六人僧」の1における(強  
 戯としての)剃髪の所作に近似する。

○いたしやうが有と云て、だうぐもきる物もとつて、かしらをそらふと云て、  
 しろきづきんをかづかせて、ころも、じゆすと、あみがさをそばにおき、  
 あみがさをかしらにかけて、ころもをばうへにきせて(虎明本「悪太郎」)  
 ○伯父「思ひ出したる事がある」と云て、かみをそる也、小袖をぬがして、  
 衣をきる、刀も長太刀も取る(天理本「悪太郎」)  
 寝ている間に髪を剃られた悪太郎は、目覚めて驚くが、これも仏の導きであ  
 るとして、仏道に入る(修行に出る)ことを決心する。

○・・・目さめてみれば、刀わきざしも、なぎなたもなふて、此ちやくし  
 たる衣と、じゆすと、あみがさの有程に、ふしんをなし、しあんをするに、  
 日比悪逆をいたして有程に、ぶつじんのおしへにて、しゆぎやうをいたせ  
 との事であらふずるとぞんじ、つけられた名のわけもしらず、うかくと  
 ありく処に、かた／＼にあひて、しゆせうなる事を承る、かやうの事もた  
 しやうの縁なる間、今よりしてはかた／＼の弟子にならふ(中略)へいまよ  
 りは思ひきり／＼、たゞ一心に、あみだをたのみ、たゞ一心に、みだをた  
 のみて念仏申して帰りけり(虎明本「悪太郎」)

○・・・定而これは、それがしのあく心をひるがへせとある事に、しやかほ  
 とけの、是まで御出あつて、かやうにおうせられたと存るほどに、けふ  
 よりしては、後生一べんに身をないて、名をも南無あみだぶつといわれ  
 て、仏道に入と存る」と云て行・・・アト「実、今こそはさとりたれ、扱  
 は六字の名号を、シテ「夢につきたるわが名なれば、二人「今よりは思ひきり  
 へ、た、一念にあみだをたのみ、た、一しんにみたをたのみ、念仏申し  
 てかへりけり(天理本及び同抜書「悪太郎」)

○太郎「これはいかな事、此やうに釈迦如来のしておかしられたものであら  
 ぶ(中略)太郎「子細ある事じゃ、某もその方の弟子となつて、お供して諸



国へ参りたい、連れてくたされい 僧「やすい事、連れだち申さう 太郎」この様体を謡ふて参らふ 節「今よりうき世の事を思ひ切て たゞ一筋に阿弥陀を頼んで 念仏申 修行にいざや出ふよ く」

三浦俊介氏は、「六人僧」における「酔人出家譚」（仏典に発し『今昔物語集』以下の中世説話に見られる。「悪坊」「悪太郎」もその系譜に属する）の利用を指摘されている。ただし三浦氏も注意するように、「六人僧」には「酔」の要素が欠落している。男甲は酒に酔いつぶれて寝ていたわけではない。しかし、強戯とその仕返しとしての剃髪を機縁としてそのまま仏道を願う、または修行に出るといふ大きな枠組みは生かされているのである。その意味で、三浦氏の言う「酔人出家譚」（あるいは酔婆羅門出家説話）の基本的枠組みは、本曲にもそのまま受け継がれているといえよう。

つまり、「六人僧」の構想は、酔狂の男が（自分の意志ではなく）髪を剃られ、それに驚きながらも、そのことを機縁として本当に発心・出家してしまう「酔人出家譚」の系譜の中に位置付けられるのである。そして、それは狂言の範囲においては、特に「悪太郎」の構想・演出の影響が認められるということでもある。

ところで、「六人僧」には近世以降の展開がある。それは先に述べたような落語への、あるいは近世の草子類への展開である。ここでは右に確認したような「酔人出家譚」の枠組みはどうなっているであろうか。

「六人僧」を原典とする落語「大山詣り」（または「百人坊主」）では、剃髪された男女は仏道に励むことはない。少なくともそのことは描かれない。大山詣りに行った男たちの妻がみな坊主になり、一行が帰って来て怒るところで、「お毛が（怪我）なくてめでたい」というサゲとなる。一方、上方落語「百人坊主」では、伊勢参りに行った一行と坊主になったその妻たちが和解して日常に戻るが、伊勢参りに行かなかった村中の男女までも付き合いで頭を剃ってしまうことになる。しかし、これは単に坊主頭になっただけで、発心・出家したわけではない。

その他、近世の草子や随筆に見える類話を順次確認してみる。十返舎一九の黄表紙『滑稽しつこなし』（文化二年刊）第四話でも、剃髪された三人の男と二人の女房は、

これよりまたく髪をのばし、ついに日数たち、みなく元の如くの頭となり、それより互いに仲良く暮しける<sup>23)</sup>

とあるように、互いに髪をはやし仲良く暮らすことになる。根岸鎮衛『耳囊』（文化十一年成立）巻之一「悪しき戯れいたす間敷事 并悪事に頓智の事」も、剃髪・出家した女房たち（それぞれの夫は剃髪されない）はやがて、

（右新尼は）還俗して此頃は三、四寸も髪の伸たると云ひし。其近隣の者来りて語り笑ひぬ<sup>24)</sup>

という結果となる。また、これらに先立つ類話として中込重明氏が指摘する、滑稽本『俗談唐詩選』（宝暦十二年序）巻之二「飲中八仙は口頭の交り」も同様である。<sup>25)</sup>

以上のように、「六人僧」の近世的展開とされる作品（草子・随筆・落語）においては、「強戯とその仕返しによる剃髪を機縁として一同が後生を願い、また仏道・仏詣に励む」という「酔人出家譚」において引き継がれていた結末は、完全に消え去っている。それは「酔人出家譚」の基本的枠組みの消失を意味する。剃髪されても発心しないこと、これこそが本曲の近世的展開の重要なポイントと考えられる。

### 三、小舞と酒盛りの場の添加

ここであらためて、宝暦名女川本「六人僧」に小舞が添加された意味を考えてみたい。小舞は、酒盛りの場面でシテによって舞われるのであるから、これは「酒盛りの場の添加」という問題でもある。まず男女うち混じつての酒盛りという趣向が珍しい。さらにその男女（夫婦三組）は、にわか僧・にわか尼の姿である。僧と尼がともに酒盛りするというのも従来の狂言にはなかった趣向といえよう。そしてその珍しい状況を踏まえて発想されたのがその場で舞われる小舞である。

「あらあら面白の」から始まり、僧と尼が酒を飲み舞い遊ぶという内容は、極めて遊興的・和楽的である。ここには、強戯をきっかけとしてはからずも剃髪してしまった男女一同が自らの姿をあらためて客観視するゆとりも看取されよう。そもそも、この状況で酒盛りをすること自体、明らかに一同の「和解」を表現するものではなからうか。本曲では、強戯によって剃髪された

男甲の鬱憤は、男乙・丙及びその妻たちの頭を剃ることによって晴らされ、また、だまされた男乙・丙とその妻たちの鬱憤は、男甲の妻の頭を剃ることによって解消されたはずであるが、その上で、一同の酒盛りを設定するということは、明らかに、この二組の男女の和解・和合をさらに強く印象付ける場面として機能させる意図が看取される。この「和合」の場面を付加することにより、(男女ともに発心することなしに)髪を伸ばし「仲良く」暮らしたという黄表紙『滑稽しつこなし』第四話、あるいは一同和解して日常に戻る落語「百人坊主」等、本曲の近世的展開である類話と共通するムードが醸成されたともいえよう。しかし、この小舞にはまた、先に指摘したように、僧と尼がともに念仏に勤しむ光景も描かれている。酒盛りをして遊ぶ光景だけではないのである。

そのような内容を持つ小舞の添加は、一方で続狂言記の結末とよく照応する。そしてこの結末は、まさしく「酔人出家譚」としての枠組みに沿ったものであった。続狂言記は、剃髪を機縁として仏道に励もうとする男女一同が念仏を唱えて、一種の「シャギリ留め」(実際には笛の唱歌を口で言うのであろう)になる。このような「酔人出家譚」の基本的枠組みを生かした結末を前提として、あるいは(小舞をもって留めるとすれば)その結末の意味するところを包み込むかたちで、鶯伝右衛門派では、小舞とそれを伴う酒盛りの場面の添加を着想したのであろう。その結果、「六人僧」の近世的展開である草子や落語に近い、発心に至らない「和解」の要素と、中世以来継承される「酔人出家譚」の枠組み(強戯を機縁とする発心)の双方を生かす場面が成立することになった。宝暦名女川本「六人僧」の結末には、いわば狂言「六人僧」が継承していた中世的要素と、同曲の近世的展開との交錯が認められるのである。

先に述べたように、小舞の末尾にある「たえがたのべつじ」は別れの時を表すとも解される。ここに、この小舞を舞うシテにとつての「別離の悲しみ」が看取されるとすれば、この小舞の内容は、強戯に始まった剃髪の連鎖に対して「和解」し、剃髪した自分たちの(ちぐはぐな)姿をゆとりをもって眺めるという態度から出発して、念仏に勤しみつつ、互いの「別離の悲しみ」へと移行する、と解され、その締めくくりに「男女(夫婦)の別れ」というニュアンスを添えていることになる。そうであるとするれば、ここには、結末において男女が別れる(妻は留守、夫は修行、または夫と妻は別々に修行)という和泉流諸本の結末と軌を一にする方向が認められよう。

宝暦名女川本は、宝暦十一年頃、名女川家五代・辰三郎の書写によるものであるが、その内容には、三代(近藤)六右衛門の活躍した宝永・正徳期の稀曲探索の風潮の影響があると見られる。<sup>(26)</sup>「遠雑類」の冊に収められている「六人僧」も、そうした稀曲の一環として、右の時期に続狂言記から取り入れられ、小舞を伴う酒盛りの場面を加えたかたちに改変された上で、「遠雑類」に収められたことは疑いない。そうであれば、右のような小舞の締めくくりは、明和元年書写の明和中根本より先行するかたちで、和泉流的な方向の先取りとなったともいえよう。

### おわりに

鶯伝右衛門派の小舞本に収められる小舞「六人僧」は、確かに同派の狂言「六人僧」の中で舞われるものであった。そのことは、新出の宝暦名女川本「遠雑類」に収める「六人僧」によって確認されるが、宝暦名女川本に記された詞章を後の小舞本と比較すると、長府伝承の浜田本と多く一致する。このことは、鶯流の地方伝播のあり方を考える上での一つの手掛かりになろう。

その小舞の内容は、剃髪した男女が仲良く酒を飲むことともに、念仏に勤しむ光景も交えて、ついには「別事」「別離」に至るといふもので、「地主」「尼衆(時衆)」という語呂合わせを契機とした「田村」の謡のもじりとなっている。

そもそも狂言「六人僧」は、曲中で繰り返される剃髪という行為が構想上重要なモチーフであり、そうした剃髪を表現する演出は、「呂蓮」「拄杖」「昆布布施」などと共通するが、本曲では望まざる剃髪であり、またその仕返しというところに特色をもつ。さらに、その剃髪を機縁として、後生を願う(仏道修行に出る)という構想が認められるが、それは「悪坊」「悪太郎」と同じく、「酔人出家譚」の枠組みを継承するものであった。その枠組みを生かした続狂言記(結末を前提とし、あるいはその結末の意味するところを包み込んで、鶯伝右衛門派では、小舞を伴う酒盛りの場面の添加を着想したのであろう。

これにより、宝暦名女川本「六人僧」の結末には、本曲が継承していた中世的要素(強戯を機縁とする発心)とその近世的展開(発心に至らない和解)の交錯が認められることになった。さらにまた、この小舞の締めくくりは、男女が別離する和泉流諸本の結末の先取りといえる。



本稿では、宝暦名女川本「六人僧」における、酒盛りと小舞の添加の意味を以上のように考えてみた。江戸前期の盛んな稀曲上演の風潮が鷺流にもたらした影響、とりわけ稀曲復興に伴う改変・改作の具体的諸相については、今後も宝暦名女川本「遠雑類」所収曲を中心に、さらなる考察を積み上げる必要がある。

注

- (1) 狂言役者の演じる歌舞の芸。小舞の性格については、拙稿「小舞の歴史と性格」(『狂言作品研究序説―形成・構想・演出―』和泉書院、令3所収。初出は平15)を参照されたい。
- (2) 鷺伝右衛門派の小舞の全貌は、享保保教本「小舞」、能研本・浜田本の小舞集の他、山口県文書館蔵「小舞 上中下」、山口県立大学郷土文学資料センター蔵「小舞仕方附上下」、『鷺流狂言 小舞仕方附 別冊第貳号』、『土車 他』、『葛城 他』(以上四点は春日庄作筆)、山口鷺流狂言保存会蔵「鷺流狂言 小舞仕方附本 附翁手附」によって知ることができ。
- (3) 浜田本小舞集「逆髪 他」の書誌と翻刻は『山口鷺流狂言資料集成』(山口市教育委員会、平13)に収められている。
- (4) 「佐渡 鷺流狂言」(第二冊)(真野町教育委員会、昭57)に翻刻所収。
- (5) 永井猛氏「新出 鷺流狂言『宝暦名女川本』の離れについて」(『能楽研究』44、令2・3)。なお、宝暦名女川本「遠雑類」本文の翻刻は、永井猛・稲田秀雄・伊海孝充「鷺流狂言『宝暦名女川本』「盗類雑」「遠雑類」翻刻」(『能楽研究』44、令2・3)を参照されたい。
- (6) 宝暦名女川本「遠雑類」所収曲には、狂言記系諸本に近いか、ほぼ同じものがいくつある。注(5)の永井猛氏論考参照。そのうち「六人僧」と同様、続狂言記とほぼ同じ曲としては、「昆布布施」「六地藏」が挙げられる。なお、このことの詳細は、藝能史研究会例会(令3・10・8)における口頭発表「新出・宝暦名女川本に見る鷺流稀曲の伝承」でも述べた(発表要旨は『藝能史研究』236、令4・1に掲載)。
- (7) 新潮日本古典集成『謡曲集 中』(伊藤正義氏校注、新潮社、昭61)による。
- (8) 天正狂言本・虎明本にある「連歌(の)十徳」にも「あるひは僧たちちしうたち」と見える。日本古典全書『狂言集』下(朝日新聞社、昭31)所収天正狂言本には「地主達」と振り漢字を施す。金井清光氏「天正狂言本全釈」(風間書房、平1)は「地主」または「じしう」とすれば「寺主」「時衆」のいずれかであろうとする。池田廣司氏・北原保雄氏「大藏虎明本狂言集の研究 本文篇」上(表現社、昭47)頭注には「地主達」とある。古川久氏編『狂言辞典 語彙編』(東京堂、昭39補訂版)は、「じしゅう」を立項し、「尼たち」として、虎明本「連歌十徳」と三百番集本「若市」の用例を掲げる。
- (9) 金井清光氏は、「若市」について、和泉流諸本にいう六条道場が時衆六条派の本山歎喜光寺であること、若市が時衆尼の法名(いわゆる式房号)であること等を指摘されて

いる。金井清光氏「狂言と時衆」(『時衆と中世文学』東京美術、昭50所収)参照。なお、大藏流の「四条あたり」、宝暦名女川本「四条の道場」も、時衆の四条道場・金蓮寺(もと四条寺町)にあり、現在は京都市北区鷹峯に移転)を指すのであろう。

- (10) 「若市」は、『御能組並狂言組(寛文初期以前書上)』の鷺伝右衛門家の分に見え、鷺伝右衛門家においても、「明暦三年鷺伝右衛門書上」(宝暦名女川本「萬聞書」所収)に見える。
- (11) 『史料纂集 本源自性院記』(続群書類従完成会、昭51)所収〔南都下向記〕。
- (12) 明和元年(一七六四)、中根善左衛門堅定書写。法政大学能楽研究所(鴻山文庫)蔵。同研究所の能楽資料デジタルアーカイブで閲覧可能。
- (13) 『国文学研究資料館影印叢書6 狂言絵 彩色やまと絵』(勉誠出版、平26)・小林健二氏「描かれた能楽 芸能と絵画が織りなす文化史」(吉川弘文館、平31) I・四「狂言絵」の形成とその環境」参照。
- (14) 近年の論考としては、中込重明氏「落語の種あかし」(岩波書店、平16)第三章「大山詣り」―狂言からの着想」、岡田充博氏「落語「大山詣り」の原話」(『横浜 国大語研究』27、平21・3)がある。
- (15) 3の甲が乙・丙をだます内容に変遷がある。続狂言記及び宝暦名女川本は、「シテ」其ことじや、某義在所へ戻つたれば、誰が言ふたやら、「二人ながら川へはまつて死んだ」と言ふて、在所では泣き喚く」と甲は言う。それに対して、和泉流の江戸後々末期の明和中根本・和泉流秘書・雲形本(大本)・狂言集成本は、夫たちが高野山へ参ると言つたのは偽りで、いずれも「心よし」の女性を拵えていて、その女性のところへ(あるいは女性と連れ立って遊山に)行ったと告げるものがあり、乙・丙二人の妻はそれを信じて腹を立て自害して死んだ、と甲が言うことになっている。
- (16) 池田廣司氏は前掲論考で、この一連の仕返しは「共同体的な償いの方法」というべきものであり、「同質・同等の行為の交換によって和を保つ」という共同体的お返し民俗を消極的に果たしたものと指摘されている。同様の見解は、『日本古典文学大辞典 第六卷』(岩波書店、昭60)「六人僧」(池田廣司氏執筆)にも見える。
- (17) 「呂蓮」「拄杖」については、拙稿「呂蓮」考―クラン女説話との関連―(『狂言作品研究序説―形成・構想・演出―』(和泉書院、令3所収)を参照されたい。
- (18) 三浦俊介氏「酔人出家・破戒譚の系譜(一)」「(二)―酒が一番悪い―」(『論究日本文学』70・72、平11・5、平12・5)。ただし、「六人僧」の近世的展開である落語「大山詣り」(上方落語では「百人坊主」)には、「酔」の要素が入っている。
- (19) 「悪坊」「悪太郎」と「酔婆羅門出家説話」との関連については、田口和夫氏「酔狂―悪太郎」の形成と展開」(『狂言論考―説話からの形成とその展開』三弥井書店、昭52所収)参照。
- (20) 「大山詣り」の粗筋は、東大落語会編『増補 落語辞典』(青蛙房、昭37)による。
- (21) 桂米朝氏「米朝上方落語全集」(創元社、昭56)所収速記(桂米朝氏所演)による。
- (22) 『西鶴諸国ばなし』巻三「お霜の作り髭」にも強戯とその仕返しのモチーフが認められることが指摘されている(池田廣司氏前掲論考)が、剃髪ではなく、墨で顔に髭を描いたらずらで、発心・出家とは全く結びつかない。また同書巻一「狐四天王」には、狐の人間への仕返し剃髪によって行われるが、この話でも髪を剃られた人間がそれを機縁として出家するわけではない。
- (23) 叢書江戸文庫「十返舎一九集」(棚橋正博氏校訂、国書刊行会、平9)所収の国会図

書館蔵本による。

(24) 長谷川強氏校注『耳囊(上)』(岩波文庫、平3)所収カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館蔵旧三井文庫本による。

(25) 注(14) 中込重明氏論考。

(26) 国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースから、関西大学図書館中村幸彦文庫本によって確認した。

(27) 注(16) 参照。

(28) これは、狂言「今参(り)」の留めと同じである。「今参」の留めの演出については、拙稿「「今参」の形成と構想」(『狂言作品研究序説―形成・構想・演出―』(和泉書院、令3所収)参照。

(29) 永井猛氏「鷲流「宝暦名女川本」について」(『狂言変遷考』三弥井書店、平14)、拙稿「宝暦名女川本「無縁聲」と江山本「銀三郎」」(『山口県立大学国際文化学部紀要』28、令4・3)参照。

(30) 池田晃一氏「將軍家宣期の狂言―稀曲・珍曲の復活を計る―」(『能楽タイムズ』昭54・1)は、宮城県図書館伊達文庫蔵『御城御内証 御能御囃子組』に見える宝永正徳期に上演された稀曲のうち、寛文以前書上・享保九年書上のいずれにもない曲(十五曲)の中に、「六人僧」を挙げられている。

〔付記〕 本稿は、法政大学能楽研究所「能楽の国際・学際的研究拠点」二〇二一―二〇二二年度共同研究「新出・宝暦名女川本(能研本)の総合的研究」(代表・永井猛、稲田秀雄、伊海孝充)の成果の一部である。

## The Problem of Komai (kyōgen dance) in “Rokunin-sō” based on the Hōreki Namekawa script

INADA Hideo

1) The verses of the Komai contained in the newly discovered Hōreki Namekawa script 'Enzatsu-rui' match many of those contained in the Hamada script that was handed down to Chōfu. 2) The Komai depicts a man and woman with shaved hair drinking sake together and praying to the Buddha in prayer. It is also a pun on the verses of the Noh play “Tamura”. 3) Kyōgen “Rokunin-sō” is recognized for its idea of wishing for a future life (becoming a Buddhist ascetic) with the act of shaving as a prank. It inherited the framework of the tale of a drunken becoming a monk. Based on the premise of an ending that makes use of this framework, the idea of adding a drinking scene accompanied by a Komai was conceived in the Hōreki Namekawa version. 4) At the end of Hōreki Namekawa version “Rokunin-sō”, there is a mixture of the medieval elements inherited by this work (becoming a priest with mischief as a trigger) and its development in the Edo period (a reconciliation that did not lead to being a priest).